



九重山群

坊ヶつる讃歌について



一 人皆花に酔う時も
残雪恋し山に入り
雪解の水に春を知る

二 石楠花谷の三俣山
花を散らしつて
湯沢に下る山男
メランコリーを知るや君

三 ミヤマクリシマ 咲き誇る
山はピンクに 大船の
段原さ迷く 山男
花の情を知る者ぞ

四 四面山なる坊ヶつる
夏はキャンブの火を囲み
夜空を仰ぐ山男
無我を悟るはこの時ぞ

五 深山紅葉に初時雨
暮雨滝の水音を
佇み聞くは山男
ものあわれを知る頃ぞ

六 町の乙女等 思いつつ
尾根の処女雪 蹴立つつ
久住に立つや山男
浩然の気は 言い難し

七 白銀の峰 思いつつ
今宵湯宿に身を寄せつ
關志に燃ゆる雪を蹴る
夢に九重の山男

八 出湯の窓に夜霧来て
せせらぎに寝る山宿に
一夜を越う 明日を待つ
星を仰ぎて 霧飛びて

九 三俣の尾根に霧飛びて
平治に厚き雲は来ぬ
峰を仰ぎて 山男
今草原の草に伏す



この原曲は、神尾明正作詞・竹山仙史作曲による元広島高師（現広島大学）山岳部歌である。昭和27年7月29日「あせび小屋」の管理をしていた松本徂夫・草野一人・梅木秀徳（いずれも「しんつくし山岳会」の前身であった当時の「九州山小屋の会」の会員）の三氏が雨に降られて「あせび小屋」に沈殿していたとき、坊ヶつる～九重山の歌を作ろうと口ずさみ作詞されたもので、更にその原曲を野田宏一郎氏（当時、「九州山小屋の会」の会員）が編曲され、「九州山小屋の会」会報第11号に発表し、それを「しんつくし山岳会」で歌っていたものである。

昭和53年歌手の「芹 洋子」が歌ってNHKの「みんなのうた」に採用され、テレビで放映されて以来レコードがヒットして全国的に歌われるようになった。しかし、当時の編曲ならびに歌詞は、ここに示すとおりである。

『しんつくし山岳会発行「九州の山」』
12訂版(昭和54年7月15日)附録図より